

研究会・シンポジウム報告

2019年2月28日(木) 定例研究会報告

テーマ： 転換点としての1968—ジャン・ジュネと5月革命を中心に—

報告者(登壇順)：

1. 根岸徹郎(本学法学部教授 所員)「ジュネと壁の言葉—『屏風』から5月革命へ—」
2. 岑村傑(慶應義塾大学文学部教授)「ジュネと荒涼—68年5月のパリ、その他—」
3. 鶴飼哲(一橋大学名誉教授)「ジュネのアメリカ体験とブラック・パンサーとの連帯—アンジェラ・ディヴィス、ジョージ・ジャクソン救援活動を中心に—」

司会進行：下澤和義(本学商学部教授 所員)

時間： 18:30~20:30

場所： 神田校舎7号館731教室

参加者数：28名

報告内容概略：

ジャン・ジュネ(Jean Genet, 1910~1986)は、マイノリティの視点から作品を発表し続けたフランスの作家である。同性愛や黒人、アルジェリア戦争を取り上げるなど、社会から抑圧された者たちの声を形にしようとする作品を発表してきた。とくに1968年のパリにおける五月革命以降は、フランスの移民問題、アメリカの公民権運動、パレスチナ問題に積極的に関わった。

今回の研究会は、五月革命をジュネがどのように捉えたのかを検証し、その後のジュネの活動を再検討するとともに、50年前のパリで起こった「事件」の意義を問うことを目的とした。はじめに、司会進行の下澤和義が、ジュネが持つ今日的な意義をなぜ掘り出す必要があるのかを緻密に検証した。根岸徹郎は、ジュネが1950年に監督した『愛の唄』(*Un Chant d'Amour*)を紹介し、ジュネの創作における場とイメージの逆転の発想を検証した上で、その発想の転換が、五月革命の際に数多く見られた壁に書かれたメッセージとどのように繋がるかを検討した。岑村傑は、ジュネの政治論集『公然たる敵』から五月革命に関わる箇所を洗い出した上で、ジュネの中における政治的な思考の変革の道筋を明らかにし、この作家にとっての五月革命の意義を問い直した。鶴飼哲は、1970年のアメリカでブラック・パンサー党と行動を共にしたジュネの言動を検証し、ジュネや活動を共にしたアンジェラ・ディヴィスが関わった問題が現在もアクチュアリティを持ち続けていることを論じた。

3人の発表者はそれぞれ違った角度からのアプローチによって、ジュネの政治に関わる姿勢と、そこから生み出される言葉の力を捉え、五月革命が持っていたさまざまな問題点を浮き彫りにすることで、ジュネのテキストから現代のわれわれが何を導き出すことができるのかという議論を深めた。

記：専修大学経済学部 土屋昌明・法学部 根岸徹郎